

・ふり返りを毎時間集めたことにより、生徒が今、何を考えているのか、どんな所でつまづいているのかが、教師側で把握でき、素早い対処ができたことは良かった。

・全体学習で学んだ学び方を生かして、図書館での個人学習ができていた。また、司書の先生にご協力頂き資料の数で、生徒が困ることがなかったことも良かった。

・交流の際に資料の相手のみならず、自分の興味関心の引かれる作品を創っている仲間の所へ、資料を参考にしながら行けたのは、私の予想をはるかに越える生徒の動きであった。

(2)今後の課題

・第二部から第三部への学習のつながりに必然性が弱く、第一部・

第二部での学習を生かした詩作となっているものが少なかった。

・一つの単元であるが、三部の小単元で構成されているため、学習計画が非常に長くなりすぎてしまった。

・学習を終えた後で、学習する前と比べて「命の尊さ」に対する考えが、どのように変化したのかということ調査すれば良かった。今回はそれがなかったために、単元のまとめが不十分になってしまった。

5、おわりに

今回、この実践を行なっていく中で、司書の先生には並々ならぬご配慮をして頂き心から感謝している。各関係機関よりたくさんの本を借りて頂き、生徒の要望にあう本を揃えて頂いたのが、個人学習での成果となったのではないか。

また、難しいテーマにもかかわらず、主体的に学習に取り組んでくれた生徒にも感謝している。

このように、私自身がたくさんの人たちに支えられていることが、今回の実践を通して改めて感じさせられ、これからもその人たちの期待を裏切らない実践をしていくことが、必要なのだということも感じた。

《実践記録》

「学ぶことに喜びを感じさせるための 学習活動の工夫」を読んで

高橋 弘

実践記録「学ぶことに喜びを感じさせるための学習活動の工夫」
を書いた内田誠司さんは、本学で国語を専攻し、平成十年三月に卒

業。岐阜県教員に採用されて、加茂郡坂祝町立坂祝中学校に赴任、現在に至っている。

本誌に寄せられたこの実践記録を読んで先ず感じることは、内田さんが中学校の若い国語教師として、一時間一時間の国語科学習指導への真摯な取り組みを重ねておられるということである。「学ぶことに喜びを感じさせるための」という表題の言葉は、裏を返せば、毎時間の国語の授業に、「学ぶことに喜びを感じていない」多くの生徒たちが、内田さんの前にいた、ということである。

国語を学ぶことへの喜びも、感動もない生徒たちをどうしたらいいのか、どんな国語学習を仕組み、展開して行ったら現状を打開できるのか、「学ぶことに喜びを感じる生徒たちを育てたい」、という内田さんの強い思いが、実践研究のテーマとなり、真摯な実践へと繋がったのである。

次を感じたことは、内田さんが、「学ぶことに喜びを感じる生徒たちを育てるための学習活動の工夫」の根底に、「単元学習」の考え方を取り入れ、それに基づいて国語の学習指導を展開してみようと工夫し、実践しておられるということである。

『国語教育研究大辞典』（国語教育研究所編・明治図書・一九九一年）によると、「単元学習」について次のような説明がある。

……倉澤栄吉氏は、「国語の単元学習というのは、『国語科の学

習指導における単元法による学習計画とその指導』という意味である。」と端的に定義している。そして、単元法の本質について次のように述べている。

「単元法とは、他の諸方法に対立して特色を有するといったような異色あるものであるよりも、むしろ、すべての方法を取り入れた集大成的方法なのである。生活経験に基盤をおくけれど、興味ある反復練習をも否定しない方法なのである。子どもも自発活動を重んずるが、時として適切な教えこみ的な、教師の説明をも捨てないのである。言語主義をやめて、経験主義に立ち、よみかき偏重を脱してはなしことばにも力点を向け、程度の高い知識を排して実用に即する具体的理念を重んずる、教師はかげに退き子どもが主となってはたらく、教科書中心によりかかることなく、生きたことばの諸問題を重視する。これらを、あらゆる機会や資料を生かして、機能的な学習に持つていくのである。」

単元学習とは、形の問題であるよりも質の問題であることがわかる。（中略）

特性 単元学習は、理念も実態も多様であり、固定的、形式的にとらえることはできない。しかし、次のような原理的特徴を備えるものと考えられることができる。

(1) 教師中心の講義型や発問中心型とは対極にあるものである。学習者の言語生活を基盤とし、その興味関心(顕在、潜在)と社会的要請の接点に単元学習は組織される。

(2) 興味関心のみに基づく作業化ではなく、どのような国語の力をつけるのかという明確な目標を目ざして作業、活動が組織される。

(3) 教科書を順次扱ういき方と対照的である。教科書を包みこむような複数の豊かな、個に即した教材の発掘、収集、組織が決め手になる。

(4) 全員に同じ問題を与えるような画一的授業とは縁がない。個を生かすために、目標を重層的にとらえ、方法は多彩に用意される。特に方法については、知らず知らずに目ざす力がつくように工夫がこらされる。

(5) 教師は学習者の言語生活の実態をとらえる力や言語文化に関する幅広い知識や技術をもつことが必要になる。(中略)
動向 戦後の教育改革のソフトの面に、最も大きな影響を与えたのは、アメリカの経験主義教育であった。その具体的方法論として登場したのが単元学習である。(中略) ところがその単元学習も、昭和二十年代後半の基礎学力低下を憂える声と、能力主義や系統性重視の立場からの批判を受け、その

魅力はみとめながらも十分な定着をせずに衰えていった。

しかし、昭和五十年代に入り単元学習の価値が再認識されてきた。その理由は、教材中心の切り刻む読解や言語生活無視の動機なき作文に、子どもたちが反発し、国語科が嫌われてきたこと、それを逆から裏づけるように、単元学習一筋に歩んできた大村はま氏の実践が高く評価されたことにあると思われる。

今後、能力主義か経験主義かといった二者択一的なとらえ方でなく、真の国語能力を育てるために、言語生活に根ざした単元法による指導の進展が期待される。……

単元学習についての、この説明を読んでもみると、現在の、特に中学校における国語学習指導を考える上で、極めて示唆に富むものであることが分かる。教育現場で、日々生徒たちと接しながら、より良い国語学習指導を、と求め続ける若い内田さんが、この「単元学習」へ取り組もうとしていることは首肯できるところである。

内田さんの実践記録の中では、まず、「生徒の思考の流れに重点を置いた指導の工夫」が実践研究の一つの柱となっている。

そのことのために、資料1にあるような、教科書教材「大人になれなかった弟たちに……」以外の資料の活用、学校図書館利用、学習テーマについての詩による表現と、それをなかまと交流する学習

など、一貫して「命の尊さ」をテーマとした内容構成の単元指導計画を立てている。この単元学習計画が、生徒主体に進められる証としての「ガイダンスプリント」(資料3)も、単元学習の方向をとるならば、大きな意味をもつものである。

もう一つの実践研究の柱としての「なかまとの交流による学習の深化」。内田さんは、そのための「国語通信」を発行して、生徒達に「なかまの考えを取り込む」ことの大切さを指導していこうと考えておられる。

そういう中で、学習テーマを中心としたまとめを、詩で表現し、それをなかまで交流させてみようという試みが行われている。学習のまとめの多様化について考えていこうということで、いいことではないかと思う。また、そういう学習の中で、個人の変容過程を見ていこうとする点についても、よく考えられている。

いずれにしても、内田さんが国語科学習指導の現状にあきたらず、「単元学習」の考え方に基づく学習指導に、現状打開の方向を見出すと取り組みを始められたことに敬意を表し、実践を重ねていけることを心から祈念したい。